ソーシャルワークにおける根本問題

- クライエントの「存在」をめぐっての問い -

文京学院大学　田嶋 英行（04929）

〔キーワード〕モデル・存在者・存在

1. 研究目的

ソーシャルワークは現在において、改変の動きはあるものの、以下のように定義されている。すなわち「ソーシャルワーク専門職は、人間の福利（ウェルビーイング）の増進を目指して、社会の変革を進め、人間関係における問題解決を図り、人びとのエンパワーメントと解放を促していく。ソーシャルワークは、人間の行動と社会システムに関する理論を応用して、人びとがその環境と相互に影響し合う接点に介入する。人権と社会正義の原理は、ソーシャルワークの拠り所とする基盤である」（国際ソーシャルワーク学校連盟・国際ソーシャルワーカー連盟 2009：9）と。この定義によればソーシャルワークおよびソーシャルワーク専門職は、「人間の福利（ウェルビーイング）の増進」を目指すことになる。なおここでいう「福利」とは、「満足のいく状態、安寧、幸福、福祉などを意味する」（福島 2010：20）。つまり、「人間の存在（being）を基盤にしたよりよい状態の増進を目標としている」（田中 2010：5）のである。

ソーシャルワークはそもそも、目の前にいるクライエントが抱える生活課題を解決するために展開されるものである。なおここでいうクライエントとは、必ずしも個人であるとは限らないのであり、家族やグループである場合も想定される。そしてその際に必要となってくるのが「道具立て」（中村 2010：123）であり、それはすなわち「個別・具体・特殊な対象に実践を展開するための方法や技術」（同前）である。これはこれまでに「モデル」、「アプローチ」、「パースペクティブ」と呼ばれてきたものである。これらのうち「モデル」は、ソーシャルワークにおいてもっとも重視されるべきものである。なぜならそれは、クライエントにおける「動態としての生活課題の実状に迫る、あらかじめ準備された『ファインダー装置』」（前掲：129）であり、「課題認識への範型」（同前）であるからである。ソーシャルワークは、目の前にいるクライエントが抱える生活課題を解決するために展開されるのであり、何よりもまずその「課題」を特定することがもっとも重要となるのである。ただしここでわれわれがまず検討すべきは、にこの「モデル」を用いてクライエントが抱える「課題」を特定することが、その「存在を基盤にしたよりよい状態の増進」を図ることにそもそも寄与し得るのか、ということである。

これまでソーシャルワークにおいては「治療モデル」や「生活モデル」、「ストレングスモデル」などが提唱されてきた。「新しいモデルの登場は、それまでのモデルの問題点を指摘し、それを凌駕するべく、新しいモデルの特徴、その意義を強調」（前掲：131）することになったのである。これらのうち「治療モデル」については、「客観的証拠（エビデンス）を重視し、客観性や科学性を担保しつつ、課題を認識しようとする特徴をもったモデル、範型であり、論理実証主義に裏づけられている」（前掲：132）とされるものである。そもそもこのモデルは、リッチモンドが「医師が眼前の患者が抱える疾病（結果）の直接的原因（病理）を特定、診断し、原因を除去することを目標に治療するという過程を範にし」（前掲：131）たことに端を発しており、医学という基本的に人間を「人体」という自然物として捉える自然科学の一領域を範としている。つぎに「生活モデル」であるが、これはひとえに「生物と環境の間のバランスのとれた相互依存関係について追究する学問である生態学の特徴を、『人と環境』との関係において考究したもの」（前掲：133）であり、クライエントとその生活を自然科学の一分野である生態学にもとづいて説明していこうとする。すなわち、人間を「有機体一般」という自然物にたとえていこうとするのである。さらに「ストレングスモデル」であるが、これは「『主体』としてのクライエントを強調する」（前掲：135）のであり、「クライエント等の『強さ』を見出し、それを『意味づけ』していくことを重視する」（同前）。ただしこのモデルにおいても、クライエントの「強さ」を内的な「資源」として捉えていく（ラップ・ゴスチャ 2008：79）。なおここでいう「資源」とはそもそも、自然から得られる原材料のことであり、産業や経済、そして生活を支えるもののことを意味する。したがってこのモデルにおいても、やはり人間を「資源」という自然物にたとえ捉えていこうとするのである。つまりソーシャルワークにおけるこれらの代表的な「モデル」は、すべてクライエント延いては人間を、自然物という存在者（あるもの）をもとに捉えていこうとする。たしかにこれらの「モデル」によって、存在者（あるもの）としてのクライエントを捉えることはできるのかもしれないが、クライエントの存在（あること）を基盤にしたよりよい状態の増進を図ることは、原

理的にはできないことになる。この点に現在のソーシャルワークの「根本問題」の１つがあるのであり、ここではなぜこのような事態に陥ってしまっているのかについて、考察をおこなっていく。

2.　研究の視点および方法

あるもの（存在者）とものがあること（存在）の両者の違いについて指摘した、ハイデガー（Martin Heidegger）による見解をもとに、先に述べた事態が生じてしまった原因について考察を進めていく。

3．倫理的配慮

なお本研究は、文献をもとに考察を進めていくものであり、倫理的な観点についてはとくに問題がない。

4.　研究結果

先に挙げたソーシャルワークにおける「根本問題」の１つとして考えられる事態は、決してソーシャルワークの世界にのみみられるものではない。これは西洋思想の世界における「存在忘却（Seinsvergessenheit）」の典型的な事例の１つとして考えられるのである。それはつまり「あるもの（存在者）」にのみ眼を向け、一方で「あること（存在）」への問いを忘れ去ってしまっている、ということである。ハイデガーによれば西洋思想の根本的な「誤り」というものが、「<眼前に立ち顕れている現存者（das Anwesende）>に眼を奪われた結果、その<眼前に立ち顕れている現存性（Anwesenheit）>を偏重するに至り、結局は<完全充溢した（voll）><生き続ける働き（Wesung）>を捉え尽くさずに、たかだか、それの一面的働きに過ぎないところの<眼前に立ち顕れている現存の働き（Anwesung）>にのみ、注意を惹きつけられた」（渡邊 2008：189）ところにあると考えた。たしかに「モデル」は「直接には把握することが難しい事象や現象を抽出して、時には図式化等を試みて、描写、記述」（中村 2010：129）することで、存在者（ものとしてのクライエントを正確に写し取ることは可能にするかもしれないが、一方で存在者を存在者としてあらしめる存在については、何ら言及する術をもっていないのである。

先にもみたようにソーシャルワークの「モデル」においては、クライエント延いては人間を、自然物という存在者（あるもの）をもとに捉えていこうとする。もちろんそれはクライエントすなわち自然物として捉えていくわけではなく、あくまで隠喩（メタファー）として捉えていく。ただしこのことはハイデガーによるならば、ごく自然に生じる事態であると考えられることになる。ソーシャルワークにおいてみられるこのような事態は、近代的思考の祖としてのデカルトにおいて端的に表れているという。ハイデガーによればデカルトは「『エゴ・コギト』、すなわち『我思考ス』を、『レス・コルポレア』、すなわち『物体的ナモノ』から区別する」（ハイデガー 2003：232）のであり、そして「この区別は、それ以後『自然と精神』という区別を存在論的に規定するようになった」（前掲：232‐233）という。つまり、精神としての人間とそれを取り巻く「自然事物性」（前掲：257）としての諸事物、という世界観をつくりあげることになったのである。さらにそれは、「世界への問いをそうした自然事物性への問いへと狭めることを、強めてしま」（同前）うことになった。人間が主体（主観）になることによって、「存在するものそのものの関与の中心」（ハイデガー 1962：26）となり、さらには「すべての存在するものを自分のまえにもってきて」（前掲：24）、「存在するものを確保し、すなわち確信〔確実化〕しうることを狙」（同前）うようになる。それによって主体（主観）としての人間が、すべてを「あるもの（存在者）」として規定してしまうことになり、先に述べた「存在忘却」という事態を招いてしまうのであるが、それはまさにこのデカルトにおける「エゴ・コギト」に端的に表れているといえる。つまり主体（主観）としての自我が、すべてを「あるもの（存在者）」さらには自然物として捉えていくことになるのである。ソーシャルワークもこのデカルトによる世界観の延長線上にあると考えられるのであり、したがって主体（主観）としてのソーシャルワーク専門職が、クライエント延いては人間を自然物になぞらえ捉えていくことは、ごく当然の成り行きと考えられるのである。ソーシャルワークが「人間の存在を基盤にしたよりよい状態の増進を目標」とする限り、この事態をより積極的に解消していく必要がある。

福島喜代子（2010）「相談援助の定義と構成要素」社会福祉士養成講座編集委員会（編）『相談援助の基盤と専門職(第２版)』中央法規, pp. 19-41.
ハイデガー, M.（2003）『存在と時間Ⅰ』中央公論新社.
＿＿＿＿（1962）『世界像の時代』理想社.
国際ソーシャルワーク学校連盟・国際ソーシャルワーカー連盟（2009）『ソーシャルワークの定義　ソーシャルワークの倫理：原理についての表明　ソーシャルワークの教育・養成に関する世界基準』相川書房.
中村和彦(2010)「さまざまな実践モデルとアプローチⅠ」社会福祉士養成講座編集委員会（編）『相談援助の理論と方法Ⅱ（第２版）』中央法規, pp. 121-141.
ラップ, C.・ゴスチャ, R.（2008）『ストレングスモデル―精神障害者のためのケースマネジメント』金剛出版.
田中尚（2010）「相談援助における対象の理解」社会福祉士養成講座編集委員会（編）『相談援助の理論と方法Ⅱ（第２版）』中央法規, pp. 1-19.
渡邊二郎(2008)『ハイデッガーの「第二の主著」『哲学への寄与試論集』研究覚え書き』理 想社.